

時の動き

山川菊栄と戦後思想「天皇制批判」

女性史研究家 鈴木 裕子

山川菊栄が、社会主義者であり、フエニニストであったことはよく知られている。わたくしは、この稿では菊栄の戦後思想、特に天皇制に絞って述べたい。

軍国主義・侵略戦争批判

菊栄は、敗戦直後「軍国主義日本」批判と「国体」批判を集中的に行った。「千年の後何のために起こされ、何のために続けられているのかわからぬ支那事変の挙句」、さらに「東亜全体にまたがる広大な地域を屠殺場とするために起こされたこの『聖戦』に『みた

みわれ生けるしるしあり』と墮落したのも、そこに追いやられた奴隷自身ではなかった」（『食糧難と社会不安』『改造』46年1月号）。奴隷とは、軍国日本のために戦時動員に駆り立てられた民衆のことである。

この論考の発表後、大変話題となった丸山真男の「超国家主義の論理と心算」が『世界』5月号に発表されたが、そこには絶対無謬「天皇という権威を戴くことで政治や軍事のあらゆる判断と行動は絶対化され、「自分の良心に従って判断し行動」し、結果に対しては自らが責任を負う、という原則は無視されるといふ「無責任の体系」が指

摘される。発表上では、丸山氏よりも早く、菊栄は天皇制の誤謬を指摘したことになる。

治安維持法（1925年制定のもの）での「国体」（天皇制）批判を公然と行うことは難しかった。菊栄は、敗戦後の評論活動において、巧みな「国体」批判を行う。近代天皇制の確立過程で、日本国民の頭と心に徐々に刻み込まれ、拡大再生産され、アジア太平洋戦争期には文字通り、現人神と崇められた、天皇への尊崇、滅私奉公、忠孝一体、家族国家観は極点に達した。



天皇制の誤謬を指摘した頃の山川菊栄

「国体」（天皇制）批判

国体すなわち天皇制と家族制度について、菊栄は、「日本だけは、不変の家族制度をもち、固定した国体をもちつづけていると思ひ込み、思ひ込ませよう」としてきたと述べ、「自由を考え、自由に学ぶ」敗戦直後の執筆と推定)、日本の民主化は民衆や女性大衆が自前で作り上げていくことで成就すると強調する。

「近衛公の手記を読む」(『評論』46年3月号)は、いかにも菊栄らし

い筆の運びである。「藤原の朝臣近衛なにがしという貴族宰相が、軍帽長靴の山法師に神輿を振られて、国を棒に振り、命を棒に振ったのは家伝来の因縁」である。山法師とはいふまでもなく軍閥であり、近衛文麿は、古来から天皇家と因縁の深い五摂家の筆頭である。この一文は、近衛批判とともに天皇・天皇制批判を行っているのが特徴である。「最後の断が天皇ひとりの意思にかかっていることは、天皇個人の思想、性格が一切を支配する独裁的権力を意味するもので、これほど大きな危険はない」。天皇が平和を希望しつつ、自己の意思に反して、軍閥代表の意思に従う危険もあれば、天皇自身軍国主義者である場合には進んで戦争を選ぶ危険もある。

敗戦の際、「終戦の詔」を発しラジオや新聞が総動員され、「終戦」は天皇の「国民」を思う「大御心」であり、聖断であつたという神話を流通させた。

これに対し菊栄は「開戦といい、終戦といい、最も利害関係の深い八千万国民の意思を無視して、一人の主権者の意思によって決定されるところに在る」と指摘、欺瞞性を衝いた。

「自主と強制」(46年中の執筆と推定)では「敗退というところを転進といい、降参のことを終戦といい、占領ということを進駐といいくるめるウソは、あまり気づかれずにいる」、「この戦争の侵略的意義をごまかす手段にすぎない。降伏のことを終戦といつて、さも自然に、対等の関係で戦争が終わったかのような印象を与えようとしてゐる」。支配層による言葉のウソとその内実について厳しく批判している。菊栄が軍国主義・植民地主義の遂行に天皇制が果たした責任を逸早く指摘し、民主化の主体形成に力を注いだか、改めて注目したい。

(すずき・ゆうこ) 20年9月6日記